



加藤 陽子 著
『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』
(朝日出版社) [210 K103 1]

本書は、東大教授が高校生に教えた授業の記録。加藤先生は本校が使用している日本史教科書の執筆者である。日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦・満州事変・日中戦争・太平洋戦争と戦争を続けた結果、日本は大敗北を喫した。当時、国力が十倍以上あつた米國と戦争をしても勝てるわけがなかった。『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』卓抜な書名である。

「しくじり先生、俺みたいになるな」というテレビ番組が面白い。しくじり先生が教室で生徒たちに授業をする。検事でもなく、弁護士でもなく、まして裁判官でもなく、被告がしくじりから学んだ教訓を語る。加藤先生は戦前の指導者や国民が残した膨大な史料を読みこみ、検事や弁護士たちが論争を続けて

きた日本現代史を被告の身になって考えようとした。新鮮な視座からの授業は好評で、二〇〇九年に出版されるとベストセラ―となり、今も版を重ねている。最初の授業で先生は、一九三〇年代の日本は今の米國と似ているという。中国との戦争は討匪戦(とうひせん)、すなわちテロとの戦いだ、悪いのは条約を守らない中国だと、大半の国民が正義の「戦争」と信じこんでいた。先生の授業は刺激にみちている。生徒も質問にどンドン答える。こんな授業を試してみた。

カズオ・イシグロ 著
土屋政雄 訳

『わたしを離さないで』
(早川書房出版) [933 12 3]

ある施設で育てられ、今は介護人として「提供者」の世話をしている主人公の回想から始まる物語。残酷すぎる運命を背負

いながら、それでも幸せを夢見て、逃れることのできない現実と使命、そして自らの最期を受け入れていきます。この本はそんな運命の中で生きる彼らを丁寧に、でも淡々と書かれています。もっととあらすじをお伝えしたいのですが、文才のない私がこれ以上書くこととネタをばらしてしまいたいので、ここまでにしておきます。数年前、参考書を買うついでに息抜きになる本をと思い、特に何も考えずに手に取ったのがこの本でした。読み終わった後、現実ではありえない運命の中にいる彼らのことを、なぜか他人事とは思えなかったことが今でも印象に残っています。日本では今年の一月からドラマ化、イギリスでは二〇一〇年に映画化されています。映像から入り、その後原作を読んでもいいと思います。が、できれば原作から、そして、これ以上の前知識を入れることなく読んでほしいです。(ドラマでは素敵な俳優さんと女優さんが出ているので観ている方もいるかもしれません。)

読書案内

の本は、「生について、命について、未来について、題名の意味することは」と、いろいろなこと考えさせられ、人生の折々で読み返したいと思える本となりました。みなさんもそういう本と出会うことが出来ますようにと願いながら、私は今度こそ息抜きになる本を買って出かけようと思います。

志村 幸雄 著
『世界を制した「日本的技術発想」』
(講談社) [502 S3 1]

日本は技術立国であると言われていた。この書籍ではこれまでの時代を振り返って、その強みを発揮するようになった経緯について筆者の意見が述べられている。それを技術の視点だけではなく、社会学の視点でも見ているところも非常に興味深い。筆者の意見で最も私が共感したことは、日本が科学技術のアイデアを「生む」のに長けているのではなく、「育てる」ことに長けているということである。根幹の技術は日本以外の國で発明されたが、製品は日本で実用化された例が多く挙げられ

ている。これについて、単なるアイデアの横取りではないかという見方もある。しかし、他にそれを同じレベルで実行できている國が思い浮かばないことからも、日本は実用化の力が強みと言えるものではないだろうか。この書籍では日本の優れている点を多く見ることが出来る。ただし、気を付けなければならないのは、ここで述べられている内容は過去のことである。ゆえに、将来日本が世界で勝ち抜くための手法がそのままであるとは限らない。例えば、日本の省エネ技術は世界から注目を集めているが、省エネの必要性が著しく低下するような代替エネルギーが見つかるかもしれない。結局のところ、未来のことは誰も言い当てることのできないので、過去を振り返った上で、自分自身や自國に必要なことを各自がしっかりと考えて行動することが一番ではないだろうか。将来、幅広い活躍をすのであるう生徒諸君には是非とも読んでいただきたい一冊である。



小松英雄 著
『古典再入門』

『土左日記』を入りぐちにして
(笠間書院)

少し恥ずかしい話から始めます。

「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」(傍線M)

この『土左日記』冒頭の一文に与えられた評価を国語便覧から拾ってみると、「ある女性が書いたものだということ(中略)断っている」とあります。

この本に出会うまでは、私もそう信じて疑いませんでした。

この本の帯には刺激的な三つのフレーズが並びます。1「教室で習った古文、教えた古文をリセット」2「仮名文の楽しさ

にはじめて触れる醍醐味と目からウロコの連続」3「紀貫之は女性のふりなどしていません」

特に3ですね。かいつまんで言う、この冒頭文を書記に注目して読むと、「漢文ではなくひらがなを用いて和文の日記を書く」という宣言だった、という可能性が見えてくるということなのです。

先生から教えてもらったこと

を信じるあまり「男もすなる」の「も」に「？」マークすらつけずに、同じ説明を繰り返していた自分自身のあり方への反省を持たせてもらった本です。

定説を鵜呑みにしてはいませんか。「どうして？」ということとを、「昔からそうだから」と安易に納得してはいませんか。

皆さんは、その瑞々しい感性をもつて「？」を大切にして下さい。これから出会うものに、真剣なまなざしをもって向き合ってください。

きっと新たな学問の可能性が見えてくることでしょう。皆さんに期待しています。

西村京太郎 著

『九州新幹線「つばめ」誘拐事件』

(集英社文庫)

いわずと知れた十津川警部シリーズである。様々な場所や乗り物で殺人事件が起き、十津川警部と亀井刑事のペアと捜査一課の同僚たちが難事件に挑むのだが、なかなか斬新でおもしろい。今回の事件では、九州新幹線「つばめ」で幼児が誘拐されるのだが、移動している車内

いなくなり、探しても見つからない。とうとう終着駅(鹿児島中央駅)についても姿がない。また誘拐事件にもかかわらず、犯人から身代金の要求もない。さらに後日発見されたにもかかわらず、父親は「変質者に連れて行かれただけで、これは誘拐事件ではないでしょう。」と誘拐と認めない。捜査依頼をしない、よって警察も動けない。まさに「ないないづくし」である。さて結末は……それは読んで確かめてもらいたい。

ところでこのシリーズを読むと当時の生活が知れとても興味深い。今では、「新大阪」鹿児島と直通新幹線もあるがこの当時はない。この作品で「鹿児島中央駅」となったが前の作品では名称変更前の「西鹿児島駅」だった。旧作品の中ではブルートレインはもう走っていない。ある事件では、バスツアアのバスごと行方不明になる。スマホで添乗員に連絡すれば……当時はまだ携帯電話すら普及していない、などなど。今後「北陸新幹線」、「リニア中央新幹線」を題材とした作品も発表されるだろう。時代の背景を垣間見る。

読書案内

こういった視点でシリーズを読んでいくのもおもしろい。

S&A・ゴロン 著

井上一夫 訳

『アンジェリック』

(講談社) 他

先ず紹介したいのは、『アンジェリック』(全26巻)。十七世紀ルイ14世の時代のフランンスで貧乏な貴族の娘に生まれたアンジェリックがたくましくも魅力的に辿った人生の物語です。舞台は子供時代の情景から、宮廷、地中海の海賊、モロッコの後宮、新教徒弾圧の抵抗運動から新大陸へと続くスケールの大きな冒険小説です。多くの資料に基づき、綿密な調査の上で書かれた人物や情景描写で当時の人々の暮らしが伝わってきます。第26巻が出たのが一九九一年で、残念ながら今は絶版になっていますが、各地の公立図書館にはあるかもしれせん。

毛色のかわったところでは、今野敏の『隠蔽捜査』シリーズ(新潮社)現在5巻出ています。警察官僚竜崎伸也が主人公です。警察小説としての面白さ

と共に、事に当たって竜崎の官僚としての決断が見事で名言が随所にみられます。

最後に英語のペーパーバックです。『ダ・ヴィンチ・コード』を書いた Dan Brown の『DECEPTION POINT』558ページ。舞台はアメリカ。大統領のスタッフ Reche は命を受けて北極へ。NASA、大統領、Senator Sexton。何が deception なのかワクワク読み進める謎解きです。

推理小説を英語で読むなら、Agatha Christie や「検屍官」の作者 Patricia Cornwell の Dr. Kay Scapeta シリーズ。ダン・ブラウンより、特にクリステイの方は短編もあるので、取っ掛かりやすいと思います。

2000「ペーJ英語を読んでから『英語がわからない』と言いなさい。」これは昔習った高校の先生の言葉です。英語2000ページ。挑戦してみませんか？

